

福大医学部



進学校とインターハイ

福岡大学医学部支部長
高木忠博(十五回卒)

福大の入試の偏差値は毎年上昇しています。ご多分に漏れず医学部の偏差値上昇はエツと驚く程になりました。今迄は福岡大学と久留米大学2校合格すれば久留米大学の方へ学生は入学していました。しかし最近はその人間が当校の方へ入学する様になりました。そして大きな変化は出身高校がドンドン全国版になってきている事です。灘開成高校卒は流石に居ませんが進学校と言われている全国有名高校の人間は大体居る様です。最近の特徴は長崎青雲高校、佐賀弘學館高校、西南高校が11〜5人程の大量入学者を出して来ます。付属大濠からは3〜4人と劣勢です。一時期は5〜7人程は必ず合格していましたが最近では減少気味なのが気になります。小生は後輩達に我々大濠人は福大直系の医学部生であると話しますが、この調子だと声が自然に小さくなりそうぞ悔しい限りです。そこで進学校と運動クラブ活動と言言葉に付いて少し考えてみました。野球、サッカーなどインターハイスポーツでは各高校間はグラウンドで競争しますが、入試も全く同じで大学と言うグラウンドで入学試験と言っ点数競争をしているに過ぎません。基本競争原理は全く同じだと思います。そしてどんな勝負でも勝たねば意味がありません。負け犬の遠吠えでしょうか、「過程」を結果よりも優先して重視する人間がいまですが小生には、言い訳にしか聞こえません。最も大事な事は、結果だと思います。「過程」も色々な大切な教訓を教えますがこれには面倒で正体不明の「主観」と言つものが入り、一番大事な結果の影が非常に薄くなつてしまふ傾向があります。しかし「結果」には主観の入る余地が全く無いので非常に現実的且つ具体的な教訓を教えると思います。人

より一歩先の結果を出す義務を果たす。」と言つ体験が青年期には必要と考えるならば偏差値競争も競技競争と呼び名は違いますが本質は全く同じだと思います。進学校と言言葉は偏差値競争の勝者の呼称でしょうが本来の進学校の意味は、社会の中で生産的活動の種を創造し自由と義務と責任の關係と意味を十分理解し履行する素養を確実に身に付けさせて知識に対する好奇心を持つて次の最終高等教育機関の大学に如何に多数送り出したか？が進学校の本来の意味に変わつて行くと思ひます。戦後は卓越した処理能力を持つ「秀才」を必要とした状況が日本には続いて来ましたが、そして遂に先進国の仲間アジア人として初めて入る事を日本は達成しました。しかしその成功した戦後教育の制度疲労の限界が噴出した状況が今の日本の教育の現状ではないでしょうか。それが「リーダー」が居ない。」と言言葉の中に今迄の教育の壁が集約されて語られている様に思ひます。小生は今後多分中等学校間の競争で生き残る教育機関の哲学には次の二つに大きく分類できる様に思ひます。リーダーを作るか。基礎レベルを支えるか。ではないでしょうか。我々大濠高校は今迄は「の社会的一翼を担う事しかチャンスを買いませんでしたがそれを大濠は十分達成して来た高校と思ひます。しかし小生は大濠人の多くは成人して必ず何処かの分野でリーダーの仕事をしている人間が非常に多い様に思ひます。何故か？と考え小生なりに分析してみました。それは我々大濠人が無意識の内に男子として成すべき義務と責任に付いては伝統的に逃げる事なく正面から背負う事を常識とする価値観を大濠の教師が繰り返し教育して来た様に思ひます。絶対に卑しくあつてはならぬ男子たる者正々堂々と毅然と物事に対して覚悟を決めてぶち当たれ！は耳に聒聒が出来るほど強要されて来た大濠の底流に流れる伝統の価値観の様だと思ひます。本物の「の選抜達成は大変な労力を要する第一級の高等な事業です。労多くして微々たる結果しか生まない長い

時間を必要とする地道な事業です。本来教育とは国家百年の計。」と言ひます。欧米先進国の言う自由な教育の概念ではこの1の為の教育哲学は数百年の歴史を有しその結果を今でも出し続けています。先進国ではこの教育の中核の仕事は全て私学が担っています。日本の教育が先進国の常識に1000年掛かつてヤツと教育の役割分担の意味を理解したのが現在ではないでしょうか。例えば東大教授の出身高校の多くは開成高校出身で阪大の教授の出身高校は多くは灘高校になつて居るそうです。全部私学出身者です。地方の国立大学教授は終戦当時と同様に昔の名門公立高校出身者が多いようですがそれでも私学出身教授が増えています。福大も然りです。しかし今日本を中心で動かしている人間の出身高校は私学の人間が圧倒的に多い状況になつて居る様です。自由の教育には義務と責任とリスクが伴う事を yes と宣言し行動する教育集団の私学が存在すると言つのは成熟した一級国の教育常識が在る証なのかもしれません。そしてこの事が常識的に理解できるか否かは国家の完成度を見る一つのバロメーターになつて居るのではないのでしょうか。私立福岡大学付属大濠中等学校はこの使命を十分に認識すべき時にあるのではないのでしょうか。大濠はこの命題に決して怯む事のない集団に成長していると確信します。寧ろ万が一怯んだ様な行動を取れば大濠の歴史に自ら唾を吐いた事と同じになると考えます。小生は福岡大学医学部一回生の大濠人として支部後輩を上記の哲学で引つ張つて行きたいと思ひます。支部長である小生の評価は自分と同じ鼻づが強い優秀な後輩大濠人がしてくれれば信じます。そして必ず小生の行動結果をシッカリ分析して新しい次の時代を彼らが義務と責任を認識しリスクを背負つて確実に切り開いて行つてくれると思ひます。小生は21世紀になりヤツと私学が私学らしくある事が受け入れられる教育環境が整つた時代が来たと思つて居ます。チャンス到来です！

11回40周年

平成16年11月6日(土)、セントラルホテル福岡にて、昭和39年卒業第11回卒業(40周年)同窓会を開催しました。来賓として、家宇治校長、郡田副会長にご出席いただきました。

卒業して40年にもなると、前回(35年)、前回(30年)と比べますと、出席者が減つてきています。その辺がちよつと寂しいところですが、特に今回は、恩師の先生の出席が無かつたことが残念でした。

最初に家宇治校長より、母校の近況の中で後輩達の文武における活躍を拜聴しまして、頼もしく感じました。その後、懇親になり、遠くまでいく学生時代を思い出しながら飲み交わしました。

懇親しながら、一人づつ近況報告をしていただきましたが、みんなそれぞれ仕事の仕事会社のPR、まだまだ第一線で頑張っている近況や経営者としてバリバリ踏ん張っている同級生もいたり、娘さんの花婿募集をされる方がいたり、孫の話をする人、ほちほち定年を間近に第二の人生の事を語られる同級生など、人生いろいろ」という歌がありますが、つくづくみんな頑張っているな」と感じました。欠席者の近況報告にも、国内や海外出張予定の忙しい企業人、転勤していつ帰れるかわからないといった声、七転八起の人生の人間経営上の問題で苦戦中の同級生などです。大濠魂で頑張つて下さいとエールを送りたい気持ちです。

仕事の事、家族の事、これからの人生の事、みんないろいろ悩みながらも旧交を深めながら最後に輪になって、声高らかに校歌を斉唱し、再会を約束してお開きしました。

また、家宇治校長には最後までお付き合いいただきまして、ほんとうにありがとうございました。

平成16年12月21日

第11回卒業幹事 藤川次宏